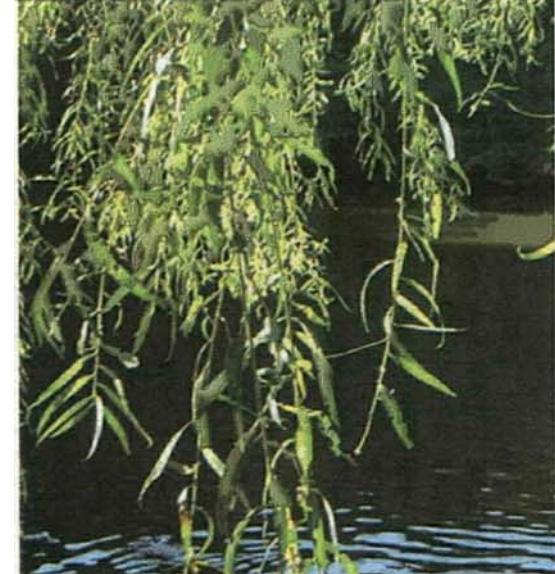


「アスピリン」の歴史から 後発品について考える

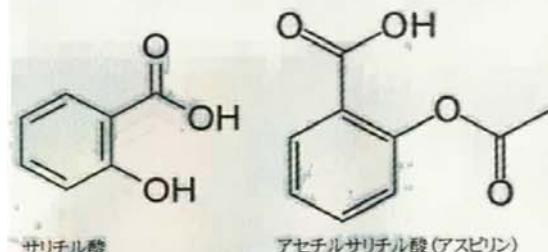


串畠重行医師

■始まりは中国



ヤナギは枝や葉にサリチル酸を含むことから、解熱鎮痛薬としても用いられ、後にアスピリンが作られることになりました。



サリチル酸



1897年ドイツの化学会社バイエルのフェリックス・ホフマン(Felix Hoffmann)はサリチル酸をアセチル化することで副作用の少ないアセチルサリチル酸(アスピリン)を合成しました。彼の父親がウマチに苦しんでいたため、父親が安心して飲めるリウマチ薬の開発を志したといわれています。

玉子酒にとうとう、自然界には解熱鎮痛剤の候補になるような物質がたくさん存在します。これらは実際に消炎酵素剤として医薬品になっており、プロメラインはキモタブ、リゾホフマンは、サリチル酸の強い酸性が胃腸障害と苦味の原因ではないかと考え、水酸基をアセチル化して酸性を弱めたアセチルサリチル酸を試すことを思い付きます。そして

1897年8月10日、ホフマンはサリチル酸を無水酢酸によつてアセチル化し、副作用の少ないアセチルサリチル酸の合成に成功しました。このアセチルサリチル酸は「アスピリ

ン」という名前がプランチームはノイチームといふまようじの始まりだといわれています。また、西洋では紀元前400年ころヒボクラテスがヤナギの樹皮を熟や痛みを軽減するために使い、葉を減るために使用していました。これが古くから知られています。

ナギに含まれる成分が解熱・鎮痛作用を持つことが古くから知られています。

そのほかにも、消炎作用のあるプロメラインというサリチル酸は、胃腸障害と強い苦味で、実用には耐えないのであります。ド

ソチームを含む卵は風邪

に目をつけ、当時29歳の化学者フェリックス・ホフマンにその副作用を軽減する研究を命じました。

ホフマンは、サリチル酸の純度が低かったのではないか」ということがいわれています。あくまで想像ですから成分という単語で、逆に「バイエルアスピ

リン」という名前がプランチードとして通用するようになります。

第一次世界大戦のドイツの敗戦での「アスピリ

ン」という商標は連合国によって取り上げられ、5

31万ドルでヨーヨークのスターリング・プロダクツ社に売られました。スター

リング社は、その商品名「バイエルアスピリン」をそのまま続けたと

して「アスピリン」の後発品を販売され、100年以上たつ現在も世界で使

用されている医薬品です。イエルアスピリン」というブランドとしてのすごさが分かります。

■「アスピリン」の後発品離されました。ただしの

19世紀にはヤナギの木

から解熱・鎮痛作用を持

つ物質、サリチル酸が分

離されました。ただしの

19世紀にはヤナギの木</p